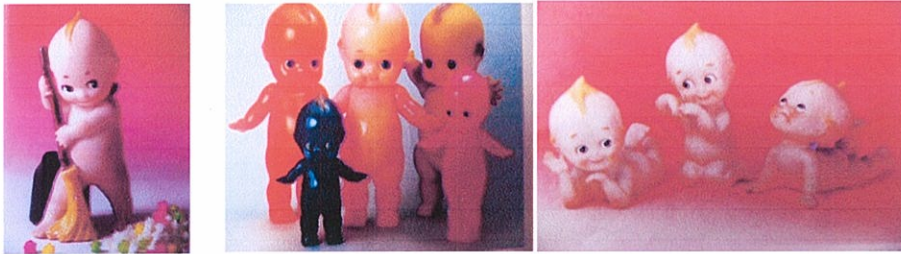


## キューピー

セルロイドハウス横浜館々長代行 野木村政三

キューピー。丸顔で頭のとっぺんにトンガリ、お目々パッチリ、背中にチョッピリ羽根がある、想い浮かべるだけでほほ笑んでしまうキューピー。

両手を広げ両足を揃えて裸できちっと立っていて男の子か女の子なのか分らないが可愛いキューピー。座っている、這い這いしている、白色・肌色・黒など大中小、いろいろな姿態のスタンドキューピーとアクションキューピーがあります。



キューピーを見ていると、生きている幼児のような感じになります。

キューピーには、いわゆる子供むきの可愛い”お人形さん”だけでなく、世界の老若男女の心を惹きつける芸術的普遍性が、どこかに感じられます。

\*\*

キューピーの生みの親は、アメリカ人・女流イラストレーターのローズ・オニール (Rose O'Neill 1874~1944) です。

ローズ・オニールは 1909 年 35 歳の時、アメリカの人気婦人雑誌「レデース・ホームジャーナル」のクリスマス特集号に可愛く戯れる新しいキャスターの一群を描いたイラストを発表し、そのキャラクターに「KEWPIE」という名前をつけました。

それが大変な評判となり、次の号も、またその次の号にも連載され、あっという間にキューピーが全米の家庭に温かく迎えられました。

そうして、イラストでない“人形のキューピー”が欲しい、立体的なキューピーが欲しいという要望がアメリカ国内で強まりました。

多忙になったローズは、1911 (明治 44) 年、プラット美術学校で彫刻を学んでいたジョセフ・カラス (Joseph Kallus) を助手として採用しました。それからローズとカラスは生涯の仕事上のコンビになります。カラスは原型作りの才能に長けていました。

二人はキューピー人形を試作しました。素材は「コンポジション」といわれるウッドパルプ (おが屑や紙をまぜてドロドロに煮たものを型にいれて乾燥させ、樹脂や糊やワック

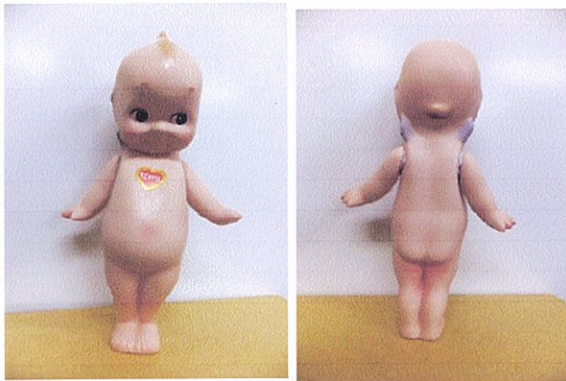
すで固めて造型する混合物) でした。ローズ・オニールは、その素材が気に入りませんでした。

ローズは、ドイツ人形やフランス人形に使われている素材の「ビスク」をキューピー人形にも使いたい、と思っていたのです。しかし、アメリカにはキューピーに適したビスクを扱う工場がありませんでした。(ビスクは柚薬『陶磁器の表面にかけて艶を出す薬』をかけた焼物で、2度焼きの陶器ともいわれています)

ローズは、ニューヨーク市のジョージ・ポークフェルド社々長フレッド・コルプ (Fred Kolb) から、ビスク用のキューピー人形のデザインを依頼されました。同社はドイツやフランス商品の輸入商社でした。

彼女は、立っているキューピーと座ったキューピーの二つの原型を作成してコルプに送りました。するとコルプは、その原型をドイツのケストナー (J.D.Kestner) の工場に持ち込みました。

ローズ・オニールはこのことをたいへん喜び、1912年みずからドイツに渡って工場で指導監督に当たりました。



当時イタリアで美術を学んでいた妹カリスタを説得してドイツに呼びよせてローズの仕事の補佐役にしました。

1913年、左の写真のようなビスクのキューピー人形第1号が完成しました。このビスクのキューピーが飛ぶように売れ、アメリカとヨー

ロッパでキューピー狂時代がおきる状況でした。{パテント登録はローズ・オニール}

ケストナーの工場だけでなくドイツの多数の陶器工場がキューピー製作に乗り出しました。コルプ自身もオールドルフに自社工場を建ててキューピーの製造を始めました。

キューピー工場の数、第1次世界大戦が勃発してもフランスなども含め、30もの工場がキューピー製作に拘わったということです。

1975年フランスに、1878年ドイツに、セルロイド製造会社が設立されセルロイド玩具が作られていましたので、キューピーもセルロイド生地を使って作られるようになりました。

しかし職人が戦争に駆り出されるなどで、ドイツにおけるキューピー人形の製造が難しくなってきました。ドイツから敵国アメリカ向けのキューピー輸出も、まもなくなくなりました。

1918 (大正7) 年、ローズは妹とともにニューヨークに帰国しました。

1925 (大正14) 年、ローズはニューヨークに「ローズオニール・キューピー・ショップ」



ダンボ

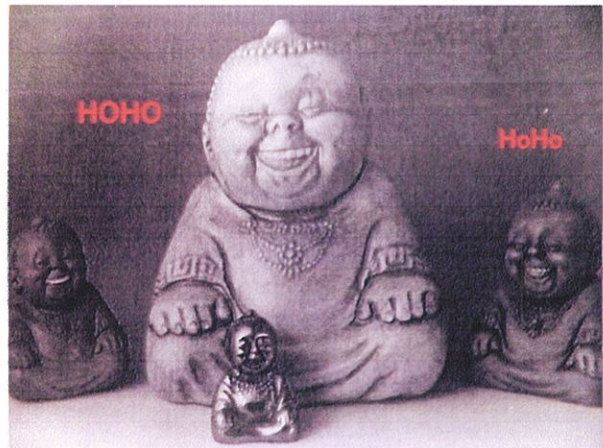
を開店しました。カメオ社（CAMEO）も設立して経営をジョセフ・カラスに任せます。カラスは、ローズの意をうけて様々なタイプのキューピー人形作りに貢献しました。

ローズが黒人の子供たちが壊れたキューピーで戯れているところを見かけ、黒いキューピーを作って子供に提供したこともありました。

カラス

は「空を飛ぶダンボ」も彫刻しました。

ダンボはディズニー映画で最高の視聴率を獲得しました。カメオ社はキューピーの著作権を所有するだけでなく工場を持って自社製品も作りだしました。



ローズは 67 歳（1940 年）のとき笑う大仏様、ホホ（HOHO）を発表しました。ホホがローズの最終作品となりました。

それから 4 年後の 1944（昭和 19）年 4 月、ローズ 69 歳、沢山のキューピーたちに囲まれ病院で亡くなりました。第二次世界大戦終結の前年でした。

ローズ・オニールが描いた素晴らしいイラストは数千枚と言われていますが、セルロイドハウス横浜館もそれを収蔵しています。

＊ ＊

去年 2012（平成 24）年は、ローズ・オニールがドイツでキューピーを誕生させてから丁度 100 年に当たる年でした。100 年を記念してキューピー発祥の地ドイツ・オールドルフ市に於いて、「キューピー生誕 100 年ドイツ・エスタ」が行われることになりました。

このエスタの企画主催は、アメリカ IROCF（インターナショナル・ローズ・オニール・クラブ・ファンデーション）日本支部長で日本キューピークラブ会長の北川和夫氏でした。

IROCF の本部のあるアメリカでは毎年エスタが、ローズ・オニールの墓所の近くの町で行われています。

今回のドイツ・エスタには、IROCF・ローズ・オニール財団理事長デヴット・オニールさん（ローズ・オニールの大甥）が参加されました。彼は、この稿が参照させていただく本（大澤秀行著・キューピー賛歌・出版芸術社）に写真が大きく載っているポール・オニールの跡継ぎです。

北川会長ほか日本人グループは、2012 年 10 月 22 日午前 1 時、羽田国際空港を飛び立つて 12 時間でフランクフルト国際空港に着きました。空港に、オールドルフ市のマンフレッド・スタンド文化観光局長と通訳ミセス・ルイーゼに出迎えられ、全員がバスに乗ったと

ころで北川会長がアメリカから来たオニール夫妻を一同に紹介しました。

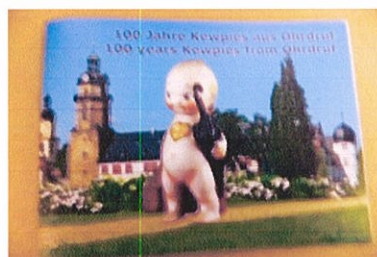
バスはドイツの誇るアウトバーンを時速 130 キロで走り、3 時間後オールドルフ市に入りました。日本人会員とデビット・オニール夫妻はテューリングゲンの森の中のホテルに同宿して一週間にわたり終始行動をともにしました。

オールドルフ市は、かつては旧東ドイツに属していました。今は世界で名高いテューリッガーヴァルト（森林盆地）の麓に位置しているので、林業が盛んな都市です。

一行はドイツ 2 日目の午前中、オールドルフ市役所にマリオン・ホップ市長を表敬訪問しました。一行は各自が持参した日本人形などの土産物を市長に手渡ししました。

市長からは各自に、下の写真の冊子（オールドルフ市のキューピー100 年祭を記念して製作した）を頂きました。

冊子は、100 年前のキューピー製作に熱狂したオールドルフ市の工場内外の状況を撮った 26 枚の写真集です。スケトナーの工場や生き生きとした従業員の人々、若き日のローズ・オニールも写っています。

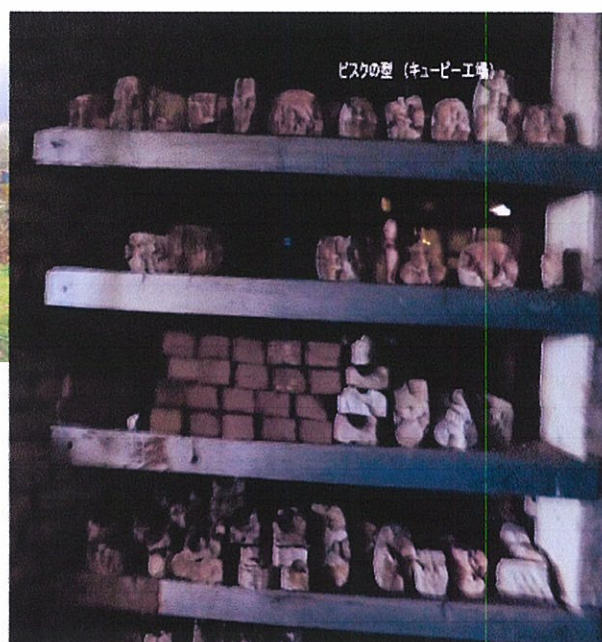


一行は、フランクで威厳の備わったマリオン・ホップ市長の後に従って市立ミュージアムに行きました。（写真右の赤い服がマリオン市長・マンフレッド局長・オニール氏）

道すがら市長から、スケトナー工場の跡地やローズ・オニール姉妹が泊まっていた下宿の場所などの説明を受けました。ミュージアムには日本から寄贈された沢山のキューピー

が、大型ショーケースに陳列してありました。

一行は、オールドルフ市以外のゴータ市やアイゼンナッハ市のローズ・オニール所縁の各地も見聞して廻りました。ローズ・オニールがキューピーの製造にかかわった工場が、一社だけ第一次世界大戦前の昔ながらの姿で現存しておりました。



その工場は、オールドルフ市郊外ルイゼンタールのヘルテル&シュワップ社です。北川会長が4年前に訪れた時は、所有者の兄上はまだ健在でキューピーの話で意気投合した、ということでした。

工場内は、窯や陶器の型などが綺麗に整備されてありました。建物も補修次第でまだまだ長持ちするように思いました。一行は仕事机の前に立って、ビスケット人形の作り方をちょっとだけ、マンフレッド局長から手ほどきを受けました。

人形の型の一部を頂いて持ち帰り、横浜館3Fに展示いたしました。なお横浜館で展示中のキューピーは、1F、2Fがセルロイド製、3Fのキューピー・コーナーは関係社の工場で作成したビスケット及びビニール製です。

2012年10月27日、オールドルフ地方に雪が降りました。午後、オールドルフ市の象徴エーレンシュタイン城内にて

「キューピー生誕 100 年ドイツ・エスタ」の講演会が始まりました。

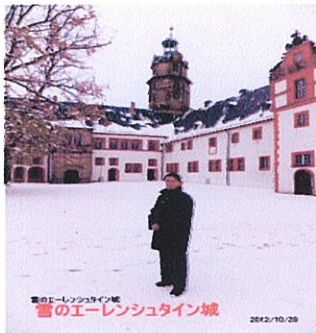


配布されたテキストが、日英独 3 カ国語構成なので大変分り易く好評でした。

会の初めに、デビット・オニールさんが「大叔母ローズ・オニールがイラストレーターになるまで」のお話をいたしました。北川さんのプレゼンテーションは、ローズ・オニールとキューピーについて 42 項目にわたる詳しい説明でした。

続いて定条さんが「キューピーのコレクションについて」。

岩井さんは「セルロイドについて」スライドを使った講演を行いました。



オールドルフ市が主催した晩餐会の席上で

「私はこれから 5 年半、市長を続けます。5 年後に又キューピー・エスタをやりましょう」と発言されたマリオン・ホップ市長の言葉が重く心に残りました。

また早稲田大学大学院の卒業生で今回、日本語の通訳をしてくれた、ベルリン・フンボルト大学の森鷗外記念館副館長ミス・ベアーデ（オールドルフ市の出身）の博識にも驚かされました。



私達一行の記事が、地元テューリンゲン州の新聞に滞在中 2 回掲載されました。

次稿、キューピー（続）